

平成 20 年度大学院入学式における学長式辞（平成 20 年 4 月 7 日）

このたび埼玉大学大学院に入学された修士課程、博士前期課程の 434 名、博士後期課程の 52 名の皆さん、おめでとうございます。

大学は「知」の創造と伝承を使命としています。皆さんは、その「知の府」の大学院に、研究するために入学してきたわけです。私は埼玉大学の教職員を代表して、皆さんの入学を心から歓迎したいと思います。

では、皆さんは大学院でどういう研究をすべきでしょうか。研究を行う際に最初に問題となり、そして最も重要なのはテーマの設定ですが、今日、文系・理系を問わず、科学の発展と人類社会の進歩のために進めなければならない研究テーマはいくつもあります。私は、大学院生の皆さんには、自分の問題意識を大事にし、かつ他人にはできないという野心的なテーマを選んで、研究を進めて欲しいと思います。

このように言いますと、「そんな大きなテーマを選ぶと論文を完成できない」という声が聞こえてきそうですが、しかし、そういうことはありません。船を例にとって少し考えてみましょう。船には巨大船もあれば、小型船もあります。古くは、大型船でも、船体を船首あるいは船尾から順に造っていました。こういう建造法では、超一流の天才でもなければ、排水量何十万トンというような巨大船は造れませんし、進水式という形で成果を見えるようにするまでに膨大な時間がかかります。

しかし、今日の造船技術は、天才でない私たちにも、巨大船の建造を可能としてくれます。それがブロック建造法です。これは、おおざっぱにいきますと、例えば船首、胴体部分、船尾というように、いくつものブロックを別個に完成し、それらを最後に溶接して船の形に組み立てるという工法です。これを研究にあてはめると、巨大船がドクター論文、そこに辿り着くまでのいくつもの論文が各ブロックにあたります。百万トン級の超巨大船の建造を目指すならば、ドクター論文も一つのブロックということになるでしょう。

もちろん、造船と研究とでは決定的に異なる点があります。ブロック建造法で巨大船を造る場合、最初から正確な設計図がなければ溶接位置が狂ってしまい、船体を完成することができません。しかし、研究は違います。研究においては、巨大船のイメージを描きますが、その完成体を明示する設計図は最後にできるものなのです。研究は、巨大船のイメージに導かれながら、各ブロックを造る作業を進め、その終了の都度、巨大船の輪郭が少しずつ見えてくるというものなのです。ですから、第一級の専門研究者が見れば、各ブロックがどれほど巨大で立派な船につながるかがわかります。そういうブロックが、高く評

価される論文なのです。そして、ブロックが一通りそろってきた段階で、全体を見直し、ブロックとブロックの間を溶接できるように修正したり、足りないところを補足して、最終的に仕上げることになるのです。

私は、実は、30年程前の自分の院生時代を思い出しながら、こういう話をしています。この思い出は私の舌に未だ少し苦味を残していますが、皆さんの参考になるかもしれませんので、少し紹介しておきましょう。私は、研究者の道を志して大学院に入学してすぐ、研究テーマを定めました。それは、国家制定法の規範を基軸にして近代日本における労使関係規範の成立史を描きなおす、日本近代史の解釈を変えるという、野心的なものです。

相当時間がかかることは覚悟していましたが、この研究は難航しました。私は、胴体部分の研究を行っている最中に、船首の形も少しずつ見えてきました。その際、畏にはまり、船首を造る研究と胴体部分を造る研究を同時に進めるという冒険を犯してしまったのです。そして、いつしか、方法的ブロックにあたる船首を先に造らなければ意味がないとまで思い込んでしまいました。結果的には、古い建造法で巨大船を造ろうとしていたと言えます。こうした隘路にはまり込んだ私を救ってくれたのは、一人の先生であり、そのとき出されたのがブロック建造法の話でした。私は先生のアドバイスを受け入れ、胴体部分をまず論文にしました。ただし、船首の構想も少しだけ入れておきました。私は決して満足していたのではないのですが、幸いにも経済史研究の大家の一人が私のこの論文に目を留め、本の中で高く評価してくれました。私が埼玉大学に採用されたのも、この論文によってです。

その後、私は巨大船の船首を造る作業の大変さを自覚し、しばらく頭を冷やしつつも、まったく別の研究を進めました。つまり、別の船の建造に着手したのです。これも予想外に時間がかかり、15年程経って著書刊行という形でようやく完成した次第です。

私の所属する学会では、進水式まで行った私の二番目の研究の方が評価されています。しかし、研究のオリジナリティーという点では、最初の胴体部分だけの論文の方がはるかに価値が高いと、私自身は思っています。同年輩の私の研究仲間もそう見えています。

今になって悔やまれるのは、もっと早い段階で先生にアドバイスを求めていれば、最初の研究も完成していただろうということです。

皆さん、大いに野心的な研究テーマに挑戦してください。そして本当に困難な問題に直面すれば、速やかに指導教員に相談してください。

なお、この場には、仕事をしながら研究することを決意して入学された社会人の方や、祖国を離れて来日し、埼玉大学大学院に入学された留学生の方もたくさんいます。そうい

う人の中には、学位を取るとすぐ社会に出て活動したいと考えている人もいるでしょう。しかし、今言いましたことは、そういう人たちにも該当すると私は考えています。どうか、どこに行っても研究を継続するつもりで大きなテーマに挑戦し、そのための第一歩をこの埼玉大学大学院で踏み出してください。

最後に、皆さんが研鑽を積み、逞しい存在に成長することを祈念し、私の式辞といたします。

平成 20 年 4 月 7 日

埼玉大学長 上井喜彦